

## 第三者意見書

シンクタンク・ソフィアバンク 副代表  
社会起業家フォーラム 副代表  
法政大学ビジネススクール 客員教授

### 藤沢 久美氏



このたび、初めてCTCグループのCSRレポートを拝見させていただきました。また、奥田社長と対談をさせていただき、レポートの柱ともなる同社のCSRの考え方について、「本業を通じての社会貢献を推進する」との解説をいただきました。それを裏付けるごとく、CTCグループのCSR方針は、同社の強みと使命を端的に述べられたものとなっています。加えて、「CTCグループと社会との関わり」として、2ページにわたり、同社が社会インフラとして具体的に何を担っているかをわかりやすく表現され、技術部門以外を担う従業員や従業員の家族にとっても、本業と社会貢献の深い関連を理解することができるに違いありません。

また、CSR方針にも明示されている「未来の情報化社会はどうあるべきかをよく考え、お客様をはじめ、多様なステークホルダーとの対話を通じて」という観点においては、「スマート・コミュニティ」や「エネルギー消費削減」に対する具体的な取り組み、従業員や取引先、第三者の意見をレポートで紹介され、多様な立場からの検討と推進を行なっていることが説得力をもって表現されていると思われま

し、かしながら、具体的なCSRアクションを解説する9ページと10ページは、きわめて実務的な項目が並び、かつ、達成状況が記号で表されており、アクションプランに対するレビューを読んでも、定性的または定量的にも、CSRの観点から十分な達成度合が実現しているのかは、わかりにくい

印象です。

CSRアクションが、実務的な表現になってしまう理由が、本業を通じての社会貢献を掲げるからこそであるならば、CSRレポートをアニュアルレポートと合本にすることもひとつの方法なのではないでしょうか。本業の各種事業部門の目標とその社会的意義を明確にし、その進捗を定性的かつ定量的に表現することで、CSRの観点と会計の観点の両方の報告を一度で行なうことが可能となるでしょう。

最後に、今後のCSRの取り組みに関して、ひとつご提案をさせていただきたいと思えます。IT事業は、インフラ的要素が強く、その成果物を第三者が見ることも評価することも難しい事業です。その成果をある程度判断する材料があるとなれば、それは、その事業に取り組む人材です。次年度は、事業を担う従業員の方々の考える未来社会の姿や自らの役割を紹介していただきたいと思えます。座談会の形がひとつの方法かもしれません。それが、結果として、奥田社長がおっしゃる「働きがい」を一人ひとりの言葉で表現していただくことにつながるでしょうし、一人ひとりの能力の最大化への取り組みを確認させていただく機会になるに違いありません。

一人ひとりの人間が働きがいを感じ、能力を開花させていく姿こそが、社会にとっての大いなる希望であり、その場を与える企業こそが、社会に最大の貢献をしている企業といえるかもしれません。